

巻頭感 大学図書館の使命

図書館長 田 中 登

二十世紀末から二十一世紀初頭にかけての情報システムの急激な変化は、大学図書館のあり様にも、さまざまな形で影響を与えている。今や、大学図書館は、単に学生や教職員の教育・研究のために必要な図書を提供する機関に留まらず、大学全体の情報交換、さらには、他大学や他の諸機関との情報交換の中心的な役割を果たすようになってきている。そのため、大学によっては、従来の図書館という名称に代わって、情報センターなる名称を採用するところも出てきているほどである。

こうした趨勢は、おそらく今後もこれまで以上に加速度的に進むにちがいない。その結果、必然的に図書館という機関が果たす役割も、従来のものとは、いささか異なってくることになるだろう。

だが、大学図書館というところが、ただ単に便利な情報の提供機関という範囲に留まっていたよいはずも、またなかろう。大学が大学という看板を掲げる以上、市町村の図書館とはまた自ずと異なった役割が、そこにはあるはずである。これを具体的にいえば、高度な学術研究機関としての大学にふさわしい、貴重な書物の所蔵なども、そのひとつといえよう。

幸いにして、わが関西大学図書館は、これまでも、そうした学術上きわめて意義深い貴重な文献類の収集に力をそそいできた。その結果、大学図書館としては、名実ともに世間から高い評価を得ているのは、これすべて先人たちの高い見識と努力の賜物である。

大学冬の時代といわれて久しく、図書館の予算など、今後は、どの大学も年々歳々厳しくなることが予想されるが、だからといって、図書館人としては、泣き言ばかりいってもいられない。そこは、なんとかわれわれの創意と工夫によって、限られた予算の範囲の中でも、学術的に価値の高い書物の収蔵に、よりいっそう努めていく必要があるだろう。

(たなか のぼる 文学部教授)